

論文

出土文字資料からみた移配エミシ集団の一樣相

—帝京大学八王子キャンパス構内遺跡群を事例に—

平野 修*

※ 帝京大学文化財研究所

はじめに

I. 帝京構内遺跡群の概要

II. 本稿における墨書・刻書土器の定義と研究概要

III. 帝京構内遺跡群の墨書・刻書土器の様相

IV. 墨書・刻書土器からみた移配エミシ集団の性格

V. まとめ

おわりに

はじめに

帝京大学八王子キャンパス構内遺跡群（以下、「帝京構内遺跡群」とする）は、東京都多摩市大字和田および八王子市大塚にわたる多摩丘陵の一角に所在し、多摩市に所在する上っ原遺跡と竜ヶ峰遺跡、八王子市に所在する大塚日向遺跡を内包している。筆者は1996年以来帝京構内遺跡群の発掘調査に携わり、1996～1997年に実施の上っ原遺跡第1次調査（報告書1）および2012～2013年に実施の上っ原遺跡第2次調査（報告書2）、2012年に実施の竜ヶ峰遺跡第4次調査（報告書3）において、東北地方との交流を色濃く示す9世紀中葉から後葉を中心とする遺構群と遺物群が検出されたことから、上っ原遺跡第2次調査報告書刊行時において、帝京構内遺跡群は9世紀前後の桓武朝期に激化した征夷事業によって制圧され、投降または捕虜となった人々が「俘囚・夷俘」として、全国35箇国以上にわたり強制移住（移配）させられたエミシの集落の一つであると考察した。その後も筆者は、考古学的見地から彼らが移配された諸国のどこに住まわされ、どのような支配を受けていたのかなどの検討をおこない（平野2013・2014・2015・2017b）、帝京構内遺跡群の他、多摩郡内では落川・一の宮遺跡や多摩ニュータウン遺跡群、武蔵国分寺・国分尼寺関連集落である武蔵台東遺跡などでその痕跡を見いだしてきた。

筆者がこれまでおこなってきた分析では、長煙道型カマドを有する竪穴建物と赤彩球胴甕をはじめとする東北系土器といった東北地方固有の遺構や遺物を取りあげてきたが、出土文字資料が、帝京構内遺跡群内の遺跡にどのように反映されているのかとい

うことについては検討してこなかった。それらは出土量が少なかったことや、釈読ができなかったことが大きな要因でもあった。

しかし先般2019年10月15日（火）～2020年2月29日（土）まで帝京大学八王子キャンパスに付設された帝京大学総合博物館において開催された展覧会「古代の多摩に生きたエミシの謎を追い」の開催期間中に、展示していた出土文字資料について多くの方々からご教示をいただき、報告書段階では釈読できなかった資料にかかる新知見を得ることができた。このことから今回は、移配エミシがその移配地で記したと思われる出土文字資料を再度見直し、その分析を通して帝京構内遺跡群内に移配されたエミシ集団の性格の一端について論じてみたい。

I. 帝京構内遺跡群の概要

帝京構内遺跡群は、古代武蔵国多磨郡内の多摩川右岸に展開する多摩丘陵内に位置し（第1図）、遺跡群内の上っ原遺跡と竜ヶ峰遺跡は、多摩川水系の一級河川である大栗川左岸のその支流によって開析された谷が東西方向に入り込む段丘上に立地している。

周知のとおり多摩丘陵は、『万葉集』で「たまのよこやま」と謳われており、『和名類聚抄』によれば多磨郡には、小川・川口・小楊・小野・新田・小島・海田・石津・狛江・勢多の10郷があり、『延喜式』の神名帳に載る「小野神社」に比定される論社の一つが上っ原遺跡の近隣に鎮座していることから、当該地域周辺一帯は小野郷域と考えられている（関2004）。さらに承平元年（931）に冷泉院（陽成上皇）



第1図．帝京構内遺跡群位置図
 (縮尺任意、1が上っ原遺跡、2が竜ヶ峰遺跡、8が東寺方遺跡)

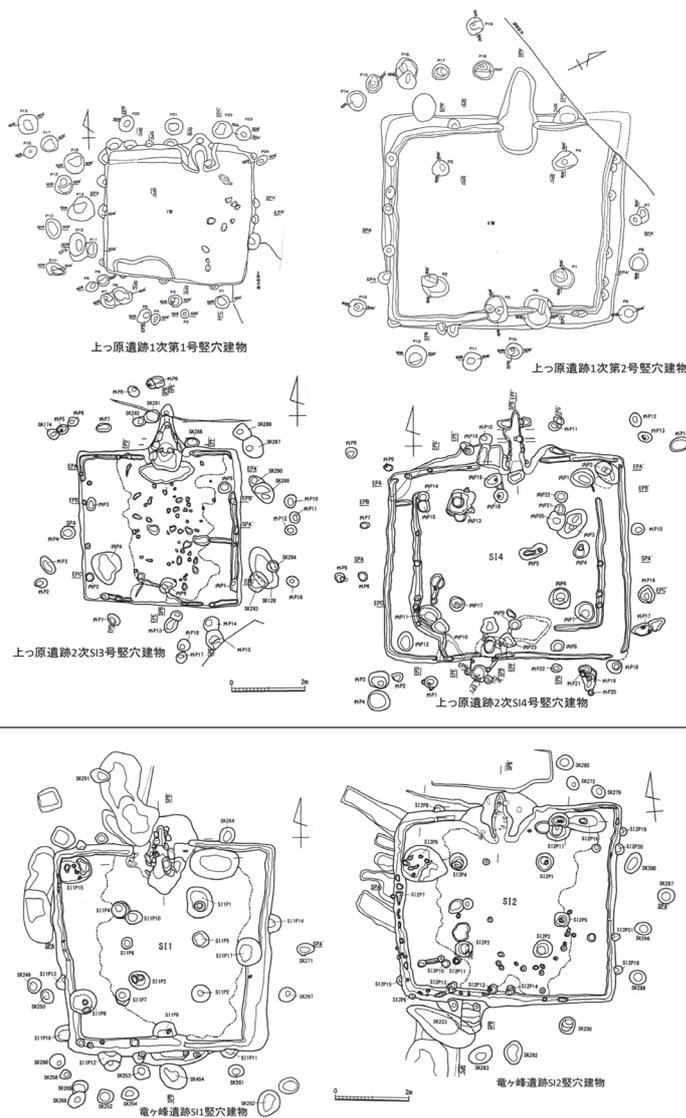
の私牧（後院牧）が勅旨牧へ編入された「小野牧」も当該地域に比定されており（川尻 2003）、当該地域は馬匹生産地帯の一つでもあった。

小野郷を構成していたと考えられる主な遺跡は帝京構内遺跡群の他、大栗川流域の東寺方遺跡や、多摩川流域沖積微高地に所在する日野市から多摩市にかけて展開する落川・一の宮遺跡や、8世紀前半代の仏堂的建物が検出されている和田西遺跡などがある。また丘陵地内では、「官」と焼印された木器が多量に出土した八王子市松木に所在する多摩ニュータウンNo.107といった新規開発拠点的な集落遺跡も存在する。さらに須恵器や武蔵国府・武蔵国分寺の瓦を焼いていたことが判明している多摩ニュータウンNo.513遺跡、通称大丸遺跡があり、さらに現在の帝京大学八王子キャンパス敷地南側斜面にも奈良時代初頭の須恵器と瓦を焼いた窯とされる百草・和田1号窯（M-1号窯）・2号窯（M-2号窯）といった窯が存在している。

その百草・和田1号窯の須恵器が出土している東寺方遺跡では、東北系土師器である栗圀式土器が出土しており（多摩市 1983）、この状況を福田健司氏は、国分寺造営に伴い東国各地から優秀な土師器製

作者が集められた結果だという見解を示されているが（福田 2008）、その是非はともかく、栗圀式土器の存在から当該地域では8世紀前半段階から東北地方との交流がおこなわれていたことがわかる。また、多摩丘陵における栗圀式土器のもう一つの主な分布圏として、多摩丘陵の一支稜である加住丘陵がある。八王子市石川天野遺跡では、7世紀代を中心とする栗圀式土器が出土しており（杉本 1991）、大栗川流域より古い様相を示している。

以上のように、巨視的にみれば八王子市から多摩市にかけての多摩川流域には、7世紀代から8世紀前半代にかけて栗圀式土器が分布する主要地域の一つであり、微視的にみれば上っ原遺跡が所在する大栗川流域は、多摩川を隔てて存在する国府や国分寺を支える窯業、木工、金属生産などの丘陵部の一大手工業生産地帯であり、かつ一体的に営まれた工人集落兼手工業生産型の集落群が数多く点在している地域である。また、武蔵国府と周辺地域を結ぶ主要交通路である東山道武蔵路を支える重要な役割を担った地域でもあり、帝京構内遺跡群は、こうした丘陵部手工業生産地帯の入り口部分に位置し、当該地域の典型的な工人集落兼手工業生産型の集落の一つで

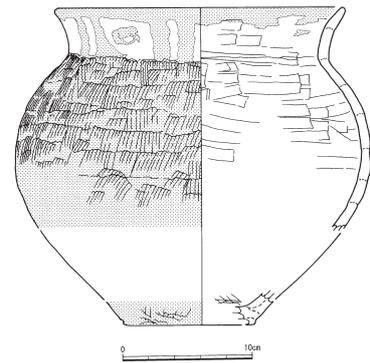


第2図．上っ原、竜ヶ峰遺跡竪穴建物一覧図
（各報告書から転載）

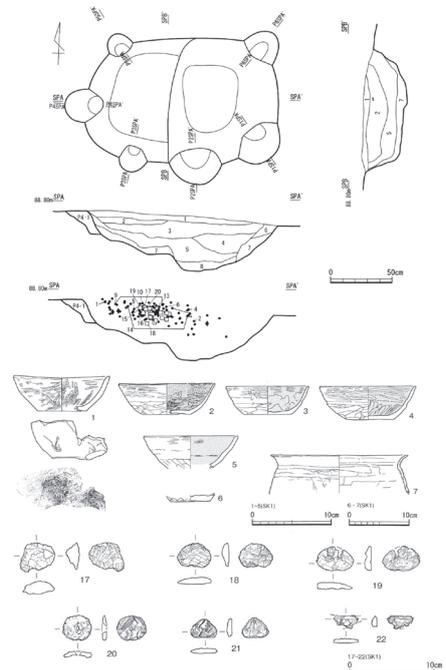
あると位置づけることができる。

さて、帝京構内遺跡群では、旧石器時代、縄文時代早期から中期、弥生時代後期、古墳時代中期から後期、奈良時代、平安時代にわたる遺構・遺物が出土しているが、今回対象とする平安時代の上っ原遺跡および竜ヶ峰遺跡における遺構・遺物の諸特徴を以下に示しておきたい。

①上っ原遺跡と竜ヶ峰遺跡からは竪穴建物6棟、掘立柱建物2棟の他、竜ヶ峰遺跡では土器焼成坑などが検出されており（第2図）、両遺跡ともに9世紀中葉と後葉の2時期に大別することができる。一時期に竪穴建物1～2棟、掘立柱建物1棟程度で構成され、遺跡の存続期間が短期であり恒



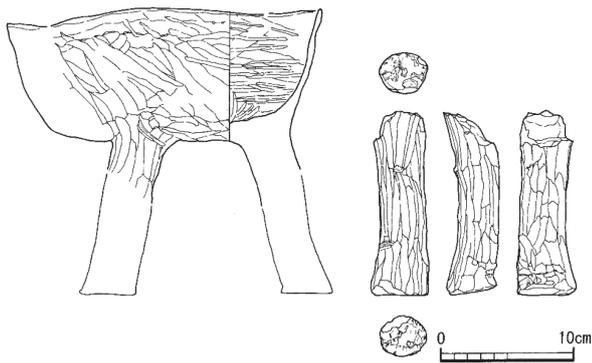
第3図．赤彩球胴甕推定復元図
（縮尺任意、平野作成）



第4図．竜ヶ峰遺跡 SK1 号土器焼成坑と出土遺物（報告書より転載作成、縮尺任意）

常的な集落というよりは期間限定の集落と考えられること。

- ②竪穴建物の規模が一辺6mを超える中型規模のものが多く、カマド構造をみると、当該地域の当該期では一般的に煙道が短い短煙道型であるのに対し、竪穴壁外に長く延びる東北地方で一般的にみられるような長煙道型のカマドを有する竪穴建物が多いこと。
- ③竪穴建物からの出土土器は、基本的に土師器は東北系土器が主体を占め、須恵器は武蔵国内産のものが主体となっていること。
- ④土器の器種は、坏、埴、長胴甕、球胴甕、鉢、三足埴で構成され、その他、須恵系土師質土器、甲



第5図．竜ヶ峰遺跡 SI2 号竪穴建物出土の三足土器
（報告書より転載、縮尺任意）

斐型土器（搬入品）などもみられる。東北系土器は回転台を利用した粘土巻き上げ成形で、甕類は粘土紐巻き上げ痕を残すものが多く、体部下半と底部外面のヘラケズリ調整、体部・底部内面は入念なヘラミガキ調整を施し、坏・壺・鉢類は内面を炭素吸着による黒色処理を施すものがほとんどで、古墳時代以来の伝統的な手法でつくられていること。

- ⑤その中でも特筆できるのは、岩手県北上市や花巻市域を中心に分布する、「大きく胴部上半の張ったややいかり肩の形態で、口唇端部を面取りし、調整も胴部全面にヘラミガキを施す。赤彩は口縁内外に棒線文、円文を、胴部外面に全面に施す」（杉本 2017・2019）という「赤彩球胴甕」（第3図）が上っ原遺跡から出土しており、その出自が明確であること。
- ⑥上っ原遺跡出土の赤彩球胴甕は、胎土分析および赤彩顔料の分析の結果、陸奥国内から持ち込まれた土器ではなく、武蔵国内の原料を用いて作製されたものであること（河西 2014・2017、帝京総合博 2019）。
- ⑦竜ヶ峰遺跡で検出された土器焼成坑では、東北系土器のみを焼いていること（第4図）。
- ⑧出土遺物は土器の他、釈読不明の文字や、記号状の字形を記した墨書土器や刻書土器、ウシの歯骨、帯金具、鉄斧などの鉄製品が出土していること。ウシの骨については、頭部、前肢、後肢といった特定部位の出土に留まり、しかも部分的に故意に被熱し割っている痕跡が認められることから、髄液を抽出しそれを使用した皮鞣しをおこなっていた可能性が推察されること（植月 2010）。
- ⑨竜ヶ峰遺跡 SI2 号竪穴建物の支柱穴 P1 と P2 の

間には、回転台据付ピット（P5、P11 も可能性あり）がみられ、SI1 号竪穴建物でも明確ではないが、P5・6 は掘り込みが浅いものの底面が硬化していることからその可能性があり、竪穴建物内で土器製作をおこなっていたと考えられること。

- ⑩竜ヶ峰遺跡 SI1 号・2 号竪穴建物のカマド内からは、土器焼成時などに用いるテストピース状の小型焼成粘土塊が出土したことから、土器焼成坑以外でも竪穴建物カマドで土器焼成をおこなっていたと考えられること。

以上の他、竜ヶ峰遺跡 SI2 号竪穴建物から出土の、報告書では「三足塶」とした土器について（第5図）、新たな知見が得られたので触れておきたい。当該土器は、東京都内では多摩ニュータウン遺跡群などで主に出土しており、粘土巻き上げ成形で、その形態は、底部が平底で体部が直線的に開く鉢形を呈し、手握成形で獣脚状の表現はされていない棒状の脚が、底部外面に粘土を付加して取り付けられているものである。調整方法も他の東北系土器と同じようにヘラケズリ、ナデ、ミガキ調整を丹念におこなっている。使用痕跡をみると、体部外面および脚部内側にはススが付着し、底部内外面は被熱のため器面の荒れや剥離がみられることから火鉢か火舎として使用されたものと思われる。しかしその使用回数はせいぜい 1 回程度と思われる。相伴する須恵器の年代から 9 世紀中葉頃と思われる。

当該土器については近年、古川一明氏が東北地方の出土事例を中心に「三足土器」という名称で分析をおこなっている（古川 2014）。それによると、当該土器は古代の東北地方でも特殊な形態をもつ煮炊用土器であり、東北北部の青森県と岩手県内での出土例はなく、鉢形のものとは 8 世紀代まで遡る可能性はあるものの、9 世紀代に限られ、宮城県の大賀城およびその南面一帯に位置する市川橋遺跡でしか出土例がないとされている。その使用方法についてはそれらもやはり火鉢・火舎と推測されており、大賀城国府内での儀式に供用されたものと推測されている。なお、当該土器の名称については、古川氏の分析のとおり、形態的に数種類みられることから筆者も今後は「三足土器」という名称を使用したい。

以上のような遺構と遺物の状況から筆者は帝京構内遺跡群をエミシの集落の一つであると推測したが、出土土器の総量に占める墨書・刻書土器の割合は極めて低いが、次章にて移配エミシ集落で出土し

ている墨書・刻書土器についてみていきたい。

II. 墨書・刻書土器の定義と研究概要

まず、本稿における「墨書土器」と「刻書土器」の用語を下記のとおり定義しておきたい。

①「墨書土器」は、土器焼成後に土器の消費地において墨で毛筆によって記された土器。

②「刻書土器」は、研究者のなかでは「刻書土器」と「線刻土器」に分けて捉えることもある。つまり前者の「刻書土器」は、土器焼成前にヘラや棒状工具で文字や記号を記した土器で、「ヘラ書土器」と呼称する場合もある。一方の「線刻土器」は、土器焼成後に先端が鋭利な刀子状、釘状の工具などを用いて文字や記号を記した土器をいうが、資料の中には文字であることが明確なものもあり、本稿では毛筆以外の道具で文字や記号をそれらを含んだものを「刻書土器」と呼称し、「焼成前」か「焼成後」を明記していく。

墨書土器などの出土文字資料については、「いつ、どこで、だれが、何のために」記したのが重要であり、焼成後に記された刻書土器の場合、墨書土器と同様に土器が流通した消費地で記された可能性が高く、一方、焼成前に記されているものは、その土器が生産された場で記されたものであり、そこで土器工人自身もしくは土器製作依頼人によって刻書されたものと考えられる。

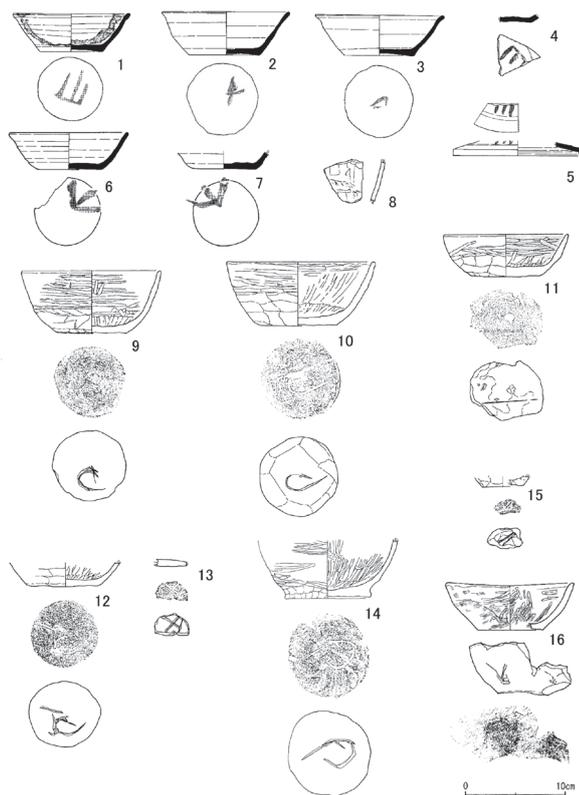
さて、墨書・刻書土器の研究概要については1970年代以降、関東地方を中心に大規模開発に伴う発掘調査が増大し、集落遺跡から多量の墨書土器が発見されるようになり、資料数の増加に伴い、かつては古代地域社会における文字の普及のパロメーターなり得ると言われてきた。しかし資料数の急増が落ち着いた1990年代に入ると、それまで文字内容のみに目を奪われていた研究手法に対して、墨書・刻書土器はあくまでも考古資料としての位置づけ、遺跡・遺構ごとに関連付けて研究をおこなう必要性があるとする研究手法が提言されるようになってきた(平川1993)。

そうした状況のなかで、2000年に平川南氏が『墨書土器の研究』(吉川弘文館)、高島英之氏が『古代出土文字資料の研究』(東京堂出版)を刊行され、墨書・刻書土器研究の総括をおこなっている。それは全国各地から出土している墨書土器の内容につい

ては、主として一、二文字程度で記されており文字の種類と字形も共通していることから、「このことは文字の普及を意味するものでなく、土器にごちそうを盛り、神仏に捧げる行為に伴う願望の表徴とみるべき」と、平川南氏はその資料的特質を明快に述べている(平川2000)。さらに、地方社会の国府や郡家に付随するような集落遺跡では、「変形した字形や則天文字、篆書体文字などの影響を受けたわが国独自に作成された特殊な文字を記した墨書土器が広範囲で確認され、(中略)記載される文字の種類は、富・吉・得・福・万などの吉祥語およびその組み合わせが目立っている」という指摘も忘れてはなるまい。平川氏は墨書土器は「一定の祭祀や儀礼行為等のさいに土器になかば記号として意識された文字を記す」ことがその本質であるとし、筆者も傾聴すべき見解であると捉えており、墨書土器のみならず刻書土器も同質であるといえよう。

墨書土器の書き手については、かつて奈良文化財研究所で開催された研究集会「古代官衙・集落と墨書土器」(奈文研2003)の討議での席上で宮瀧交二氏が「集落遺跡場合、僧侶のような宗教儀式を執りしきるような人が、筆や硯を携帯して各村々を廻って、墨書土器を使う場で文字を書いたり、それに関わった人がその場で慣れない文字を書いたという考え方が妥当」ではないかという発言をされたが、正鵠を得た見解であると筆者も賛同するところであるが、筆者はさらにそれに加えて文字の扱いに慣れた官人の関わりも想定しておきたい。なぜならば、移配エミシについては、諸国の介以上の国司がエミシを教諭・存恤(救済)をおこなうという役割を担っていたからであり(『類聚国史』巻190 俘囚弘仁4年11月癸酉条、熊谷2007)、僧侶や官人といった文字を熟知した人物たちが、移配エミシが住まう村々を巡り文字の存在を知らせ、文字を十分に熟知していない人物が「見ようみまね」で記したために、「似て非なるもの」になってしまうような字体が存在すると筆者は考えている。

一方、刻書土器や墨書土器は文字意外にも「記号墨書」「記号刻書」と呼ぶ「×」や「一」、「C」、「个」などといった直線や曲線を組み合わせた記号(符号)を記したのも目立ち、それは刻書土器には多くみられる傾向にある。古代の都城や地方官衙およびその関連集落遺跡では、墨書文字と変わらない運筆をもつ刻書もみられるが、文字を記したものがみられ



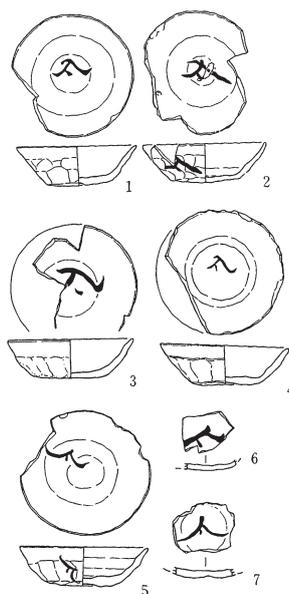
第6図．帝京構内遺跡群出土墨書・刻書土器
（報告書より転載し作成）

るが、長岡京の分析をおこなった山中章氏によれば、長岡京などでは「×」や「一」といった記号刻書土器は、非識字層である諸国から挑発された毛筆をもたない仕丁が多くいたと考えられる宮城内の周辺官司、京城の諸司厨町などの現業官司や東西市からの出土が多いという指摘がされている（山中1989・2002）。このことから、全国の集落遺跡から出土している多様な記号を記した刻書土器も非識字層の関与が推測される。

Ⅲ．帝京構内遺跡群の墨書・刻書土器の様相

次に本帝京構内遺跡群から出土している墨書・刻書土器についてみていきたい（第6図、表1）。

墨書・刻書土器は、釈読不可能のものを含めて上っ原遺跡第1次調査で5点、上っ原遺跡第2次調査で2点、竜ヶ峰遺跡第4次調査で7点、総計15点であり、土器の総出土量に占める割合は1%にも満たない状況である。なお墨書・刻書土器の年代については、後述するように両土器はすべて堅穴建物と土器焼成坑から出土しており、各遺構の年代をあてはめ



第7図．神奈川県 宮久保遺跡の「合」の字形
（平川2000文献より転載）

ている。

a. 墨書土器について

墨書土器は、上っ原遺跡第1次・第2次調査、竜ヶ峰遺跡第4次で出土している。記載内容については、「山」が3点、「个」が2点、「C」が1点、釈読不明1点である。

「山」は、上っ原遺跡第1次調査の9世紀後葉の1号堅穴建物から1点、2号堅穴建物から2点出土しており（第6図1・4・5）、須恵器坏底部外面と須恵器蓋体部外面に倒位で記している。筆致からいずれも同筆とみられ、字体は楷書体で肉太の大ぶりに丁寧にかかれているが、筆使いは不慣れな感じを受ける。明治大学古代学研究所の全国墨書・刻書土器、文字瓦横断検索データベース（2010）によると「山」墨書の事例は、東日本を中心に全国で500事例以上みられ、本遺跡群周辺では9世紀中葉から9世紀後葉の「山」と記した墨書土器の出土は、武蔵国府関連遺跡 M35区ST83 や武蔵国国分尼寺 SB53、府中市武蔵台東遺跡78号住居址などでみられ、計4点程度出土している。

「个」の2点は、いずれも上っ原遺跡第2次調査のSI4号堅穴建物から出土している（第6図6・7）。2点とも須恵器坏の底部外面の端に、「山」墨書と同じように肉太の大ぶりに丁寧にかかれているが筆使いは不慣れな感じを受ける。筆致は同筆とみられ

表 1. 帝京構内遺跡群出土墨書・刻書土器一覧表

番号	種別・器種	種類	部位・位置	釈文	方 向	時期	出土地点
1	須恵・坏	墨書	底外・中央	「山」	不明	9c	上っ原1次1号竪穴
2	須恵・坏	墨書	底外・やや端	不明	不明	9c	上っ原1次1号竪穴
3	須恵・坏	墨書	底外・中央	「C」	不明	9c	上っ原1次1号竪穴
4	須恵・坏	墨書	底外・端	「山」	不明	9c	上っ原1次2号竪穴
5	須恵・蓋	墨書	体外・	「口(山カ)」	不明	9c	上っ原1次2号竪穴
6	須恵・坏	墨書	底外・端	个	不明	9c	上っ原2次4号竪穴
7	須恵・坏	墨書	底外・端	个	不明	9c	上っ原2次4号竪穴
8	土師・鉢	墨書	体外・中央カ	不明	正位	9c	竜ヶ峰4次SI2号竪穴
9	土師・坏	刻書 (焼成前)	底外・端	「C」	不明	9c	竜ヶ峰4次SI2号竪穴
10	土師・坏	刻書 (焼成前)	底外・中央	「C」	不明	9c	竜ヶ峰4次SI2号竪穴
11	土師・坏	刻書 (焼成後)	底外・中央	「一」	不明	9c	竜ヶ峰4次SI2号竪穴
12	土師・坏	刻書 (焼成前)	底外・やや端	「Cカ」	不明	9c	竜ヶ峰4次SI2号竪穴
13	土師・坏カ	刻書 (焼成前)	底外・端カ	不明	不明	9c	竜ヶ峰4次SI2号竪穴
14	土師・鉢	刻書 (焼成前)	底外・中央	「C」	不明	9c	竜ヶ峰4次SI2号竪穴
15	土師・坏カ	刻書 (焼成前)	底外・端カ	不明	不明	9c	竜ヶ峰4次SI2号竪穴
16	土師・坏	刻書 (焼成前)	体外・中央 体外・中央	「奉」 「馬」	倒位 倒位	9c	竜ヶ峰4次SK1土器焼成坑

る。その内容については、矢印状の記号的なもの、もしくは神奈川県綾瀬市宮久保遺跡などでみられるような「合」のくずし字に類するものとも思われるが(第7図)、仮に文字とした場合、1993年発行講談社『新大辞典(普及版)』によると、同文字には少なくとも「コ」、「カン」、「カ」の3種の読み方が存在し、その意味は、①ひさし。庇。②人や物を数える語で箇に同じ。③的の下。的の下につける細長い布。幹に同じとされ、その字源は象形文字の竹を省略した字形とされる。

「个」字形についても明治大学古代学研究所の全国墨書・刻書土器、文字瓦横断検索データベース(2010)を検索した結果、山梨・千葉・埼玉・宮城・秋田・宮崎県などで50点程度確認されているようであるが、管見にふれた限りでは本遺跡群周辺ではその類例はみられなかった。

「C」は、上っ原遺跡第1次調査の1号竪穴建物から1点出土している(第6図3)。須恵器坏底部外面の中央に小さく記している。こうした傾向は、平川南氏によれば「墨書の初期段階は底部に比較的

小さく記す傾向にある」とし、「墨書土器の絶対数が少なく、しかも墨書内容の種類が少ない場合」に示す傾向だという(平川2000)。このことは書き手が筆を使い文字を書くことに慣れていないため、書きやすい底部外面という安定した場所を選んだものの、自信がないため文字が小さくなってしまったのだろうか。

また「C」の内容については、次項の刻書でも同様の字形がみられるのでその際に述べたい。

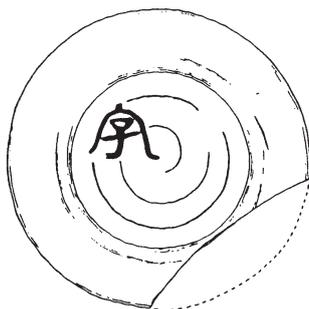
墨痕風の資料は、上っ原遺跡第1次調査の1号竪穴建物から出土しており、須恵器坏の底部外面に記している。文字か否かは不明で、筆慣らしの可能性もある。

第6図8の竜ヶ峰遺跡第4次調査の9世紀中葉のSI2号竪穴建物から出土している釈読不可能とした資料は、東北系土器の土師器鉢の体外外面に横位に記しており、筆使いは慣れた感じを受けるが、墨痕が薄くかすれており不明瞭で、報告書の段階では「真」もしくは「直」としたが確実とはいえない。

以上、墨書土器についてみてきたが、墨書されて



第 11 図 . 篆書体の例
(平川 2000 文献より転載)



石川・黒田遺跡



千葉・高岡大山遺跡

第 12 図 . 篆書体の墨書土器事例
(平川 2000 文献より転載)

径 6.0cm、器高 4.2cmを測り、非回転（ロクロ）成形で内外面ヘラケズリ、ナデ調整を施し、入念なミガキが施されているが黒色処理はされていない。器面は内外面とも被熱のため胎土内の小礫が発泡し抜け落ちたり、赤褐色や灰色に変色しており、焼き損じの状況を示している。

刻書した道具はヘラではなく、先が非常に細い工具であり、刻みも深く非常に鮮明である。報告書では、いずれも焼成後の刻書土器としてしまったが、再検討の結果、文字線の両端の粘土が盛り上がっていることから「焼成前」の記載と訂正する。

刻書は体部外面の二箇所倒位で記されており、先述のとおりいずれも非常に細い鋭利な工具で記されている。その内の一つについては、「夫」という字形がみられる。線の一部が器面の削り調整により消滅しているが、これについては、平川南氏が「奉」という文字の省略形の一つであるという見解を示しており（平川 2000）、その見解を筆者も支持していることから「奉」とする。

そしてもう一つは報告書段階では筆者の力量不足で絵画状の描画的なものとして、東北地方に類例を探してみたものの管見にはふれることができず不明のままになっていたものであるが、先述した帝京大学総合博物館での展覧会にて当該資料を実見していただいた高島英之氏から以下のようなご指摘をいただいた。

- ①この土器に記された刻書は文字で、『角川書道字典』（伏見 1977）の「馬」の項に見える字形群の中で、篆書体に似るものがあり、篆書風に書かれた「馬」である可能性があること（第 8 図）。
- ②通常の楷書体の「馬」「午」の文字が記された墨書土器や刻書土器は、全国的にも枚挙に暇がないものの管見の限り、篆書風の字形で「馬」と記された墨書・刻書土器の類例は他にみられないこと。
- ③「C」状の刻書土器については、「得」の草書体の変形した字形の可能性があると（第 10 図）。

①の指摘については当該刻書をみると、『角川書道字典』に見える篆書体の字形とはやや異なっており、「似て非なるもの」のようにも思われる。そのことに対して高島氏は、対象が土器であるが故に相当書きづらかったため、非常に稚拙な書体になったのではないかとおられたが、筆者はそれよりも書き手である土器工人が、文字を熟知していなかったため、土器製作注文者が示した「馬」の篆書字形



第13図．帝京構内遺跡群周辺の牧推定地（帝京総合博 2019 文献より転載）

を「見よう見まね」で記したためと考えている。

以上のように、高島氏の指摘が正しいとすれば、篆書風の字形で、しかも焼成前に記された事例は初めてであり、「夫」＝「奉」と合わせて読めば「奉・馬」で「ウマをタテマツル」と釈読することができる。その内容は、東日本で広くみられる一定の祭祀や儀礼行為に基づくものとなり、その使用目的が理解できる資料と言えよう。

次に③の「C」状の刻書が「得」の草書の変形した字形であるということについても、近年、東日本各地でこうした字形が数多く確認されている状況であることを鑑みれば、十分に可能性があると思われる。しかし筆致はカーブを描くが、それ故に途切れ途切れになってぎこちない。多少迷いを感じるが「C」は、後述する則天文字の「○＝星」（第10図）の可能性もあるのではないかと筆者は考えている。

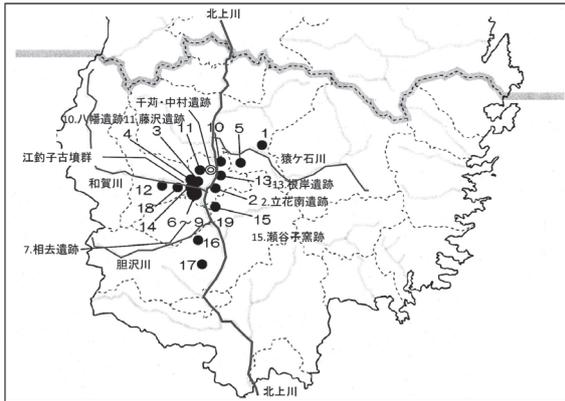
篆書体文字については（第11図）、現在でも天皇の印章（御璽）にも用いられている字体であるが、よく知られているように紀元前221年に中国全土を統一した秦の始皇帝が漢字を、人を対象として行政の道具に用いるために文字の統一と整備をはかった隷書・楷書のもとになった漢字の一書体であるが、墨書土器にみる篆書体の事例は、これまでも石川県黒田遺跡や千葉県高岡大山遺跡（第13図）や、宮城県市川橋遺跡、群馬県中屋敷・中村多遺跡、神奈川県海老名本郷遺跡、神奈川県国分尼寺北方遺跡、新潟県半ノ木遺跡、長野県榎田遺跡、大宰府史跡など

で確認されているという（田熊 2006）。また、出土文字資料以外では、正倉院所蔵の『東大寺献物帳（国家珍宝帳）』に「鳥毛篆書屏風」なる宝物が記載されている。それは小篆の派生と思われる装飾書体で書かれた屏風が所蔵されており、光明皇后により献納されたもので、聖武天皇のもとで使用された調度品であり、文字は二行各八字で篆書体と楷書体を交互に配し、篆書には鳥毛を張り重ねる。鳥毛には日本産の雉や山鳥の羽毛が用いられており、本品が日本で製作されたとされているものである（東博他 2019）。

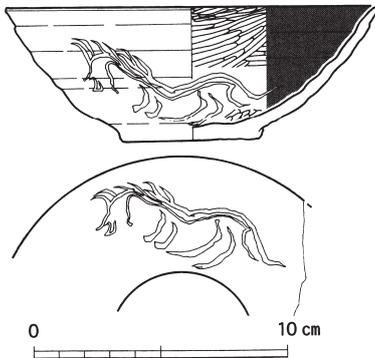
また載初元年（689）に周の武后が制定した篆書に由来するいわゆる「則天文字」の事例も墨書土器には数多くも確認されている。こうした特殊な文字が記された背景については、平川南氏は仏典の中で用いられたこれら文字の影響を指摘し（平川 2000）、東野治之氏は音義・字書をとおした則天文字や特異な文字の広まりと文字に一種の呪術的な意味が込められて書かれていた可能性を指摘している（東野 1994）。

また地方への普及については、平川氏は地方行政のルートや、仏典を通じての僧侶が会得したものと考えている他（平川 2000）、高島英之氏は、それらに加え、こうした文字を会得していた渡来人による在地社会へのダイレクトな流入を想定しており大変興味深い（高島 2012）。

以上のことから、9世紀代を中心とする帝京構内



第 14 図 . 岩手県南部の土師器生産遺跡分布図
(君島 2017 文献より転載し加筆)



第 15 図 . 八幡遺跡出土の「馬」刻画土器
(報告書より転載)

遺跡群出土の墨書・刻書土器は、他の東国の集落遺跡にみえる状況と、ほとんど変わらない状況を示していることがわかった。だが微視的にみると、上っ原遺跡と竜ヶ峰遺跡ではそのあり方が異なっている状況を見ることができる。それは上っ原遺跡の出土文字資料は墨書土器のみで、刻書土器はまったく無く、一方の竜ヶ峰遺跡では、墨書土器は 1 点のみで焼成前の刻書土器が大半を占めていることで、そうした状況からは帝京構内遺跡群には異なる二つの移配エミシ集団の存在が推測できる。出土文字資料の両遺跡における遺構と出土遺物などの状況から、上っ原遺跡は牛馬の利用に慣れ、官人層との交流あった又は有位者・カバネ姓者を含むような集団の集落であり、竜ヶ峰遺跡は土器焼成坑の存在から、土器作りを専門とするような工人集団の集落であったと推測される。

また先述したように、篆書体文字や則天文字を記した墨書・刻書土器の類例が各地で増加しているが、その出土例をみる限りでは、主に官衙や寺院関連遺

跡に偏在している傾向がみられる。それら特殊文字を記していない墨書・刻書土器についても、どの遺跡からも出土する資料ではない。上っ原遺跡や竜ヶ峰遺跡は、一見すれば山間の極小集落遺跡の一つとして捉えられるが、出土量は少ないながら墨書・刻書土器がみられ、しかも特殊文字を記した刻書土器が出土していることは、両集落は官衙や寺院の官人や僧侶たちが深く関与した集落であったと推測される。

IV. 墨書・刻書土器からみた移配エミシ集団の性格

帝京構内遺跡群は先に述べたように、多摩川を隔てて国府や国分寺が存在し、9 世紀以降須恵器生産が増大する南多摩窯跡群や、10 世紀前葉に冷泉院(陽成上皇)の私牧(後院牧)が勅旨牧へ編入された「小野牧」を含んでいた可能性が高い小野郷域にあった遺跡である(第13図)。

先にみた帝京構内遺跡群の墨書・刻書土器の様相や、その他の出土遺物の様相から、当該地に移配されたエミシ集団は、農耕の他、牛馬の飼育や土器生産、皮革製品生産などといったさまざまな手工業生産の一翼を担っていたと考えられる。帝京構内遺跡群のエミシ集団は、8 世紀後葉から 9 世紀前葉にかけて岩手県北上市の和賀川下流域や花巻市域に中心的分布域をもつ「赤彩球胴甕」が出土していることから、当該地域の「和賀」や「稗貫」を出自とする集団であろう。さらに遺跡の存続期間が短期であり、恒常的な集落というよりは期間限定の集落と考えられることから、彼らは落川・一の宮遺跡などの拠点集落を母村として、さまざまな生業にあたったと思われる。

移配された時期については、エミシの移配は史料上では神亀 2 年(725)からみられるが、移配規模が拡大するのは延暦 13 年(794)の征夷以後とみられており、移配策の内容も変質したといわれている(熊谷 2007、鈴木 2016)。彼らがいつ、どの段階で移配されたかは不明であるが、上っ原遺跡出土の赤彩球胴甕の形態や文様のあり方や、他の東北系土器にみる製作技法から杉本良氏は、「岩手県の編年では 9 世紀第 1 四半期で、第 2 四半期までは下らない」と指摘していることから(杉本 2017)、当該期頃に移配されたこととみておきたい。

なお、帰降したエミシは帰降後直ちに移配されるのではなく、陸奥・出羽国内の城柵内にしばらく留め置かれて、国家側の観察の後、他国や陸奥・出羽国の城柵管理エリアへ移配されたといわれている（平川 1987）。帝京構内遺跡群のエミシ集団の場合、赤彩球胴甕が国府多賀城の北側にあたる宮城県栗原市に所在する伊治城内や、その周辺に展開する上戸遺跡や糠塚遺跡といった集落遺跡からも出土していることから、赤彩球胴甕をもつ和賀地域のエミシ集団は、征夷事業が激化した段階でもかなり早い段階に国家側へ帰降していた可能性が考えられる。

そして竜ヶ峰遺跡の土師器焼成遺構の存在を考えると、北上川・和賀川合流域のエミシ集団は、外来の土器生産技術者と交流をもちながら、自集団の祭祀に用いる赤彩土師器（球胴甕）の大量生産を主目的として、土師器焼成坑を他地域に先行し導入した地域であるという君島武史氏の指摘が注目できる（君島 2017）。

それは、胆沢城造営後の 9 世紀初頭に胆沢の地に瀬谷子窯跡群が操業を開始し、須恵器生産が始まるが、東北北部の土師器生産遺跡の中でも、200 年近くにわたって安定的に土師器生産をおこなっているのは、北上盆地南半部に限定されるという（第 15 図）。当該地域は東北北部で最も早い段階である 8 世紀中葉に非回転成形による土師器の生産遺跡が出現し、北上市相去地区では、須恵器生産導入後も胆沢の瀬谷子窯跡群では須恵器生産を専門的に行っていたにもかかわらず、須恵器生産と土師器生産をおこなっていたのである。そして須恵器生産終了後の 10 世紀後葉にも非回転成形や回転成形の土師器生産をおこなっているという。さらに、須恵器窯検出遺跡の数に比べ、土師器生産遺跡の数および土師器焼成遺構の検出数が東北北部の中では格段に多く、土師器生産の視点から見た場合、当該地域は突出した地域であり、そうした土器づくりの技術をもったエミシ集団を武蔵国の南多摩窯群へ送り込んだのではなかろうか。

さらに当該集団は、先述したように竜ヶ峰遺跡 SI2 号竪穴建物から出土している東北系土器の一つである鉢形の体部をもつ三足土器も作製していることから、東北地域で鉢形の三足土器の出土が、多賀城城下に限定されている状況からすると、彼らは帰降後、多賀城下に一定期間留め置かれ、そこで土器生産に関わっていたとも想定できる。

そして今回取り上げた竜ヶ峰遺跡でみられる「奉・馬」刻書土器の存在については、東北北部における馬産の状況を見ると和賀川下流域には、赤彩球胴甕と強く結びついていると思われる積石塚状で、横穴式石室タイプの主体部をもつ末期古墳である江釣子古墳群があり、その周辺には同古墳群の造営に深く関わった集団の集落が数多く点在している（北上市博 1998）。江釣子古墳群五条丸支群の第 47・51 号墳では優良な馬具類が出土しており（八木 2010）、南からの渡来系移民によって 7 世紀後葉から 8 世紀前葉には馬産が開始されていた可能性が高い。それ以降も江釣子古墳群に隣接する八幡遺跡では、9 世紀中葉～後葉段階の「馬」を描いた刻画土器（北上市 2015）も出土していることから、当該地域は未だ明確な牧遺構は確認されていないものの馬産地帯であった可能性が高く、「牧」が和賀川流域などに点在していたと推測される。

また文献史料でも、『類聚三代格』延暦 6 年（787）、弘仁 6 年（815）、承和 4 年（837）に王臣家や国司らが狄馬や奴婢などの購入を禁止した記事や、国司らが馬を買い、武具を農具に交換し交易をおこなっていたという記事など、その後も陸奥・出羽両国の馬に関する史料は枚挙にいとまがない。エミシは乗馬に長け優秀な馬飼集団でもあり、そうした技能をもつ彼ら故に、皇室への馬の安定供給を確保するため、御牧や後院牧が展開する当該地域に配されたものと思われる。

V. まとめ

本稿では、釈読ができず出土量も少なかったため、等閑に付してきた帝京構内遺跡群出土の平安時代に属する墨書・刻書土器の再検討をおこない、記された内容から当該地に移配されたエミシ集団の性格について検討をおこなってきた。本章では本論の論点を整理してまとめにかえたい。

まず、帝京構内遺跡群における歴史的環境と周辺遺跡を再確認し、筆者がたエミシ集落と認定した上っ原遺跡、竜ヶ峰遺跡から検出された遺構・遺物についての諸特徴を述べ、次に帝京構内遺跡群から墨書・刻書土器の検討をおこなった。

その結果、墨書土器は上っ原遺跡では土師器にはみられず、須恵器のみに稚拙な筆致で「山」と「个」、「C」状の文字・字形が記され、竜ヶ峰遺跡では釈

読不明ながらも1点のみ土師器鉢に記されていることが確認された。一方、刻書土器は竜ヶ峰遺跡しか確認されず、その中で描画的なものとして釈読不明であった土器焼成坑（SK1）出土の資料については、「馬」は篆書体の字形とはすべて一致していないものの、それはその字形を見よう見まねで記したものと判断し、高島英之氏の指摘を首肯して「馬」とし、「夫」は「奉」の省略形の字形であることから「奉・馬」と釈読した。そして当該土器は、祭祀や儀礼行為に基づくものに使用するために焼かれた土器であると指摘した。また墨書、刻書の「C」状の字形は、高島英之氏からは「得」の草書の変形であると指摘をうけたが、則天文字の「星」の可能性もあることも指摘した。

以上、9世紀代を中心とする上っ原遺跡、竜ヶ峰遺跡出土の墨書・刻書土器の全体の様相としては、他の東国の集落遺跡でみえる内容と変わらない様相を示していることが判明した。しかし上っ原遺跡の出土文字資料は墨書土器のみで、竜ヶ峰遺跡は焼成前・後の刻書土器でほぼ占められていることから、筆者は両遺跡には性格の異なる移配エミシ集団が存在したことを指摘した。つまり上っ原遺跡の集団は牛馬の利用に慣れ、官人層との交流があった有位者・カバネ姓者であった人物を含むような集団であった。

一方、竜ヶ峰遺跡の集団は、土器焼成坑などの存在から、土器作りを専門とする工人集団の可能性があると推測した。しかし竜ヶ峰遺跡でも篆書風文字や則天文字などの特殊文字群を知り得た官人や僧侶たちが深く関与していた可能性があることを示した。

そして墨書・刻書土器からみた移配エミシ集団の性格については、第1点として、「赤彩球胴甕」が出土していることから、当該地域の「和賀」や「稗貫」を出自とする集団であり、赤彩球胴甕が767年に設置された当時、朝廷とエミシ社会が対峙する最前線の城柵である伊治城内や、その周辺に展開する上戸遺跡や糠塚遺跡といった集落遺跡からも出土していることから、赤彩球胴甕をもつ和賀地域のエミシ集団は、征夷事業が激化した段階でもかなり早い段階に国家側へ帰降していた可能性が考えられることを示した。

第2点として、竜ヶ峰遺跡の土師器焼成遺構の存在を考えるうえでは、外来の土器生産技術者と交流

をもちながら、自集団の祭祀に用いる赤彩土師器（後の赤彩球胴甕）の大量生産を主目的として、土師器焼成遺構を他地域に先行して導入し、須恵器生産もおこなっていた北上川・和賀川合流域のエミシ集団が移配されていた可能性が高く、彼らを、土器生産に関わる南多摩窯群へ送り込んでいた可能性を示した。

第3点には、竜ヶ峰遺跡でみられる「奉・馬」刻書土器の存在については、東北北部における馬産の状況を見ると和賀川下流域には、赤彩球胴甕と強く結びつく横穴式石室タイプの主体部をもつ末期古墳である江釣子古墳群があり、古墳群や周辺集落からは馬具類の出土が顕著であることから、7世紀後葉から8世紀前葉には南からの渡来系移民によって馬産が開始されていた可能性が高いとともに、彼らは渡来系移民を拒否することなく共生し、馬産や乗馬技術などを会得していった進取の気性を持ち合わせた集団であったと推測される。

おわりに

今回、こうした検討ができたのは「はじめに」でも述べたように、帝京構内遺跡群内の遺構・遺物が東北色を非常に色濃く残していたためである。筆者が検討した甲斐国などは、長煙道型カマドを有する竪穴建物と黒色土器以外、典型的な東北系土器は見いだすことはできず、それは武蔵国内でも北武蔵地域や大方の東日本の移配諸国も同様であった。おそらく文献史学側から指摘されている「俘囚料稲」の使われ方が影響していたとも考えられる（武廣2017）。移配先諸国での移配エミシへの夷禄（禄物）・時服（衣服）・公糧・口分田などの支給のされ方などの待遇の違いなどがその背景にあらう。それと合わせて移配エミシの生活痕跡が見出しにくいのは、渡来系移住民の諸痕跡もそうであるように、世代を追うごとに各地域に同化していった要因も考えられる。

帝京構内遺跡群の移配エミシ集団は、出土遺構・遺物の状況からおそらく多賀城周辺から家族単位で送り込まれた第1世代の移配エミシだったと推測できるが、赤彩球胴甕が出土した上っ原遺跡第2号竪穴建物からは明かに甲斐国からの搬入品だとわかる甲斐型土器も出土していることから、牛馬の扱いに慣れたエミシが甲斐国から再移配された集団だった

とも推測できよう。甲斐国の移配エミシと馬との関わりを示す史料としては『類聚国史』延暦19年(800)5月22日条があげられる。それには夷俘が百姓に乱暴、婦女を犯し、牛馬を盗んで意のままに乗り回すと甲斐国司が報告し、朝廷は国司に対して野俗を改めさせるように教諭し、それでも改めなければ法的処分を執るよう命じているものだが、牛馬を盗み、意のままに乗り回しているという内容からもうかがえる(山梨県2001)。9世紀中葉前後には、甲斐・武蔵両国では、院牧の設置が盛んにおこなわれ、10世紀に入ると小野牧をはじめ御牧に転換していくが(山梨県2004)、こうした武蔵国内の牧整備や運営事情に関係するのかもしれない。

さらに帝京構内遺跡群の移配エミシ集団は、国家側にかなり高い信用・信頼を得ていた集団であったがために、出身地である和賀・稗貫集団のシンボリックな土器である赤彩球胴甕や東北系土器群を武蔵国内で作製することができ、かつ所持することができたのではないと思われる。また上っ原遺跡の帯金具の出土は、地元官人との密接な接触がうかがえることから、『日本後紀』弘仁3年(812)6月2日条に、諸国夷俘の中から「推服」されるもの選んで長とするという記事がみられるように(武廣2017)、帝京構内遺跡群界隈に送り込まれた他の移配エミシ集団を統率する「夷俘長」や「俘囚長」なるエミシの有力量者がいた集団であったと考えておきたい。

そして集団のシンボリックな土器である赤彩球胴甕が堅穴建物廃絶時に、なぜ建物内に残されていたのかについては、「夷俘と号する莫かるべし」という『日本後紀』弘仁5年(814)12月1日条の嵯峨天皇の勅にもみられるように(樋口2013)、当該地を離れる時期には律令国家による「民夷融和政策」が進み社会状況も変化し、移配エミシ集団の世代も変わり赤彩球胴甕を持つ必要性がなくなったためと想定しておきたい。

以上、雑駁ながらこれまで詳細な分析をおこなってこなかった帝京構内遺跡群出土の墨書・刻書土器の分析を通して、当該地に移配されたエミシ集団の性格について推論を重ねて論じてきたため、結論部分の見解は飛躍し過ぎている感はあるが、大方の叱正をえて、更に考えてみたいと思っている。そしてこれまで本稿では「強制移住させられたエミシ」と表現してきたが、筆者自身、エミシの全てが「東北三十八年戦争」の敗者もしくは服属者とは考えてい

ない。例えば、かつて筆者は、9世紀後葉段階の東北と甲斐との交易を伴う交流を示す可能性がある資料ではないかと山梨県韮崎市の宮ノ前遺跡出土の「狄」と記した墨書土器について紹介した(平野2017a)。いずれにしる全国各地へ移配させられたエミシの存在を考古学的に捉えるのに一番の手がかりとなるのは、「東北三十八年戦争」の敗者もしくは服属した彼らだと考えている。今後も引き続き全国各地へ移配されたエミシの考古学的検討と、移配政策の多様なあり方やその本質を追究するために文献史学および関連諸学と協業して検討をおこなっていただきたい。

謝辞

本稿を草するにあたり有益なご意見、ご助言をいただいた高島英之、平川 南、坂詰秀一の各氏、資料の提供に際して便宜をいただいた帝京大学総合博物館の堀越峰之、甲田篤郎の両氏と多摩市教育委員会に感謝の意を表す。本研究成果の一部は、JSPS 基盤研究(C) 科研費JP15KO2987の助成を受けた研究成果の一部である。

引用参考文献

- 植月 学 2010「付編1 上っ原遺跡から出土したウシ遺体」『上っ原遺跡』多摩市埋蔵文化財調査報告第61集 学校法人帝京大学・帝京大学八王子校地内遺発掘調査団 120-127頁
- 河西 学 2014「第3節 帝京大学八王子キャンパス地内出土土師器の胎土分析」『上っ原遺跡(第2次)・大塚日向遺跡』学校法人帝京大学・公益財団法人山梨文化財研究所 107-115頁
- 河西 学 2017「古代東北系赤彩球胴甕の胎土分析による産地同定—岩手県北上市立花南遺跡・八幡遺跡、東京都多摩市上っ原遺跡の事例」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会 219-227頁
- 川尻秋生 2003『古代東国史の基礎的研究』塙書房
- 君島武史 2017「古代北東北の土器生産—土師器焼成遺構の分布と展開から—」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会 21-40頁
- 北上市立博物館 1998『江釣子古墳群とその時代—古代北東北の自立と個性への道』北上川流域の自然と文化シリーズ(19)
- 熊谷公男 2007「蝦夷移配策の変質とその意義」『九世紀の蝦夷社会』奥羽史研究叢書9 高志書院 7-47頁
- 杉本 良 1991「東京都八王子市石川天野遺跡出土の黒色土

- 器の系譜—南関東に於ける栗圜式系統の土師器—『東京考古』第9号 東京考古談話会 59-73頁
- 杉本 良 2017『『赤彩球胴甕』とは何か』『『俘囚・夷俘』とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会 11-20頁
- 杉本 良 2019「蝦夷の赤い土器—赤彩球胴甕とは？—」『蝦夷の赤い土器—湯舟沢Ⅲ遺跡出土赤彩球胴甕のルーツを探る！—』滝沢市埋蔵文化財センター 1-8頁
- 鈴木拓也 2016「征夷の終焉と蝦夷製作の転換」『東北の古代史4 三十八年戦争と蝦夷政策の転換』吉川弘文館 61-86頁
- 関 和彦 2004「落川・一の宮遺跡と小野神社」『古代文化』第56巻第7号 (財) 古代学協会 18-23頁
- 高島英之 2000『古代出土文字資料の研究』東京堂出版
- 高島英之 2012「則天文字が記された墨書土器」『ものが語る歴史28 出土文字資料と古代の東国』同成社 183-191頁
- 田熊清彦 2006「則天文字」『文字と古代日本5 文字表現の獲得』吉川弘文館 261-283頁
- 武廣亮平 2017「文献史料からみた移配国における俘囚と夷俘」『『俘囚・夷俘』とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会 200-218頁
- 帝京大学総合博物館 2019『キャンパス遺跡発見伝—古代多摩に生きたエミシの謎を追え』24-25頁
- 東京国立博物館他 2019『御即位記念特別展 正倉院の世界—皇室がまもり続けた美—』68-71頁
- 東野治之 1994『書の古代史』岩波書店
- 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2003『古代官衙・集落と墨書土器—墨書土器の機能と性格をめぐって—』249頁
- 樋口知志 2013『『ミネルヴァ日本評伝選 阿豆流為—夷俘と号する莫かるべし—』ミネルヴァ書房
- 平川 南 1987「俘囚と夷俘」『日本古代の政治と文化』吉川弘文館 263-318頁
- 平川 南 1993「土器に記された文字」『月刊文化財』11月号 第一法規 4-10頁
- 平川 南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 平野 修 2013「東京都多摩市上原(うわっぱら)遺跡(多摩市No.1遺跡)出土の東北系土師器について」『東京考古』第31号 東京考古談話会 67-82頁
- 平野 修 2014「平安時代武蔵国における俘囚の土器」『山梨文化財研究所報』第55号 公益財団法人山梨文化財研究所 2-4頁
- 平野 修 2015「日本古代俘囚の移配に関する考古学的検討—9世紀における甲斐国の事例」『山梨県考古学協会誌』第23号 山梨県考古学協会 19-34頁
- 平野 修 2017a「韮崎市宮ノ前遺跡出土の『狄』と記した墨書土器」『山梨県考古学協会誌』第25号 山梨県考古学協会 189-196頁
- 平野 修 2017b「武蔵と甲斐における俘囚・夷俘痕跡」『『俘囚・夷俘』とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会 41-80頁
- 福田健司 2008「第4章 私の考古学的視点 第2節 武蔵国分寺造営前後の多摩丘陵—国分寺造営の目的—」『南武蔵の考古学 増補版』国際文化財株式会社 206-228頁
- 伏見冲敬 編 1977『角川書道字典』角川書店 1144-1145頁
- 古川一明 2014「古代東北地方における特殊な形態の煮炊用土器について」『東北歴史博物館研究紀要』15 東北歴史博物館 1-32頁
- 宮原武夫 2014「第Ⅱ部第1章 房総の俘囚の反乱」『古代東国の調庸と農民』岩田書院 81-94頁
- 八木光則 2010「末期古墳副葬品からみた蝦夷社会の交流」『ものが語る歴史21 古代蝦夷社会の成立』同成社 135-220頁
- 山中 章 1989「古代都城の線刻土器・記号墨書土器」『古代文化』第41巻第12号 (財) 古代学協会 18-23頁
- 山中 章 2002「村で書く」『古代日本文字のある風景—金印から正倉院文書まで—』国立歴史民俗博物館 118-119頁
- 山梨県 2001『山梨県史』資料編3 原始・古代3
- 山梨県 2004『山梨県史』通史編1 原始・古代

報告書

1. 学校法人帝京大学・帝京大学八王子校地内遺発掘調査団 2010『上っ原遺跡』多摩市埋蔵文化財調査報告第61集
2. 学校法人帝京大学・公益財団法人山梨文化財研究所 2014『上っ原遺跡(第2次)・大塚日向遺跡』
3. 学校法人帝京大学・公益財団法人山梨文化財研究所 2014『竜ヶ峰遺跡 第4次』多摩市埋蔵文化財調査報告第69集
4. 多摩市遺跡調査会 1983『東京都多摩市 東寺方遺跡—市立総合体育館建設に伴う調査—』多摩市埋蔵文化財調査報告4
5. 北上市教育委員会 2015『八幡遺跡(2013年度)』北上市埋蔵文化財調査報告第119集

